European Living in Japan

A British Woman Fascinated by the Intricacies of Japanese Lacquerwork

日本で活躍するヨーロッパ人

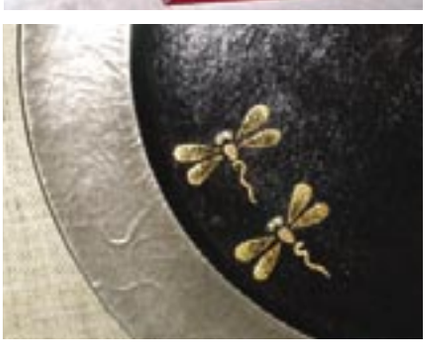
漆の奥深さに魅せられたイギリス人女性

日本列島の中ほど、日本海に突き出た能登半島の北側に位置する輪島市は、日本最大の漆器の産地として知られている。漆塗りに心を奪われて、英国から日本へやってきたスザン・ロスさんは、世界最高の漆芸術を輪島で学んでいる。

ロンドンから輪島へ

服飾デザイナーの祖母とヘアーデザイナーの母を持つスザン・ロスさんは、高校卒業後、特に迷うこともなく美術とデザインを学ぶ道に進んだ。そこで彼女は、英語で「japan」と呼ばれ、まさに日本を代表する伝統工芸の「漆」と出会った。

「初めて漆塗りを見たのは、美術学校の学生だった1982年ごろのこと。ロンドンの王立アカデミーで開かれていた『日本展』に行き、江戸時代に作られた漆の硯箱と屏風を見たんです。その途端、『これが私の作りたいものだ』とピンときたの。特に、硯箱の漆黒には非常に奥深いものを感じ、蓋にほどこされた飾りと相まって宇宙を表しているようで、思わずひき込まれました」。



三角形の置物（上）
トンボはスザンさんのシンボルデザイン（下）

漆にひと目ぼれしたスザンさんは、漆塗りを教えてくれる先生を求めて、日本へ行くことを思い立つ。日本語はまったくわからなかった。だが、漆器とはただ表面に漆が塗られているもの、と思い込んでおり、その技術は3カ月か長くても半年で身につけられる、と夕カをくくっていた。来日後、漆器づくりには想像を絶するような長くて複雑な工程があると知り、大変驚いた。

たまたま長野県に英語教師の職を見つけ、休みの日に各地の漆器生産地を回るうち、スザンさんは、漆を学ぶのなら日本を代表する輪島で、と心に決めた。スザンさんのやり方はストレートだ。直接、輪島一の漆器製作所に「弟子入りさせてください」と掛け合った。返ってきたのは「女性はとらない」という、冷たい返事。別の製作所からは「弟子はとらない」と言われたが、最終的には「漆芸研修所」へ行きなさい、というアドバイスをもらった。

漆芸研修所とは、石川県が漆器芸術に関わる人間国宝級の伝統技術の伝承などを目的として設置した技術者養成機関である。文化庁の助成を受け、授業料は一切かからない。スザンさんはさっそく基礎コースに願書を出した。

ところが、入学前に一度イギリスに戻ったスザンさんに、思わぬ人生の展開が待ち受けていた。かねてから知り合いだった男性と、ロンドンで恋に落ちたのだ。スザンさんは彼との生活を優先し、漆芸研修所への入学を遅らせることにした。1年後、漆への断ちがたい思いに悩んだ末、「私と一緒に輪島に来るか、そうでなければ別れしましょう」と決断を迫ったところ、恋人はスザンさんについて行くことを選んだ。

卵の殻で装飾したイヤリング

理解ある師の助け

晴れて漆芸技術研修生となったスザンさんの行く手には、言語の壁に加え、もう1つ乗り越えなければならない壁が立ちはだかっていた。伝統の世界によく見られる「技術は盗むもの」という風潮である。

「私は、言葉のハンディを背負いながら、少しでも早く、少しでも深く理解しようと必死でした。でも、『どうして、なぜ』という質問をすると、先生は『質問するな。見て覚えろ』と言うだけ。日本に来て、あれほど受け入れがたいと思ったことはありません」

そのうち、講師陣の中に、時には片言の英語を交じえながらていねいに説明してくれる先生が何人かいることがわかった。

ハンカチを使った銀の合鹿（ごうろく）椀（上）
草花をモチーフにした緑の皿（下）

スザンさんは、相手が上級コースの先生であろうと、人間国宝の作家であろうと、学びたい一心でぶつかっていった。

序列や組織を重んじる日本的社会風土を気にかけない外国人ならではの行動は、研修所にちょっとした事件ももたらした。卒業制作に「箱物」を作ることになり、スザンさんは扉の付いた箱をデザインした。ところが、造作は外部の職人さんに頼むため、お金がかかる面倒なものは研修所から「ノー」と言われてしまった。「どうしても付けたかったから、偉い先生のところへ直談判に行って、学校の頭越しに話をつけてきたの。そしたら、大騒動になっちゃって……」。結局スザンさんは意志を貫き、扉付きの箱は今も研修所の作品棚に飾られている。

基礎課程を修了したスザンさんは、いくつかある専門課程の中から「蒔絵（まきえ）」科に進んだ。イギリスへ帰ったら、ひとりですべての工程をこなしていかなければならないため、塗りも加飾も両方学べる幅広いコースを選んだのだ。

計5年の研修を終えるとほぼ同時にスザンさんは長女を出産し、その後の10年間は輪島で子育てと作家活動の両立に追われることとなった。

漆に注ぐ情熱

スザンさんは、最も優れた素材だけを使い、最高の技術を持った熟練の先生たちに学ぶことで、伝統的な漆芸技法を忠実に守ろうとしている。しかし、決してそれだけで良しとはしない。

スザンさんの作品には、伝統技法への畏敬の念と、殻を打ち破って新しいものを生み出そうとする活力とのバランス感覚が見え隠れする。フランスのレースを巻いたお椀、イギリスの古い家の釘隠しを用いた装飾品、ヨーロッパの草花を描いたお皿など、いずれもユニークだが決して奇をてらっていない。その着想は、スザンさんの作品をより豊かなものに押し上げている。

漆を愛するあまり、ついきつい意見も出る。「輪島の人は、もっとヨーロッパに学ばないとだめよ。イタリアやフランスのデザインを勉強して、取り入れないと。同じものばかり作っていたらあきられちゃうでしょ。そして、日本の優れた漆塗りをもっと国際的に広めていくようにしなきゃ。でも、だからといって漆塗りのワイングラスはいただけません。もし、ワインの文化を知っていれば、中身の見えないグラスは作らないはず。世界に進出するには、もっと相手を知らないと」と批判は手厳しい。伝統の世界に閉じこもりがちな日本と漆塗りの技術を持たないヨーロッパ。スザンさんは両者の間を取り持つ懸け橋になりたいと言う。

また、多くの日本人が「漆は高くて扱いがむずかしい」と誤解している、と不満ももらす。「漆器は棚の奥にしまっておいては絶対だめ。使えば使うほど、輝きが増して美しくなっていくんです。反対に、使わないとひびがはいったりしますよ。きちんと使っていれば何十年でも、百年でももちます。そのように作ってあるんです。だから、漆は決して高くはありません」。スザンさんは、自分の作品は日常的に使ってくれる人に買ってほしい、と望んでいる。

輪島でのスローライフ

「日本に来た時、滞在は3カ月か半年かな、と思ってたのに、それが今となっては22年よ。信じられる？」。長身のスザンさんが、眼鏡の奥の灰色がかった青い瞳を大きく開き、笑いながら話す。

スザンさんの家は、輪島の中心部から車で10分ほど離れた川沿いに建つ。隣家までは徒歩で数分かかるが、2人目の子どもが出来て、広いスペースが必要になった時に人に勧められて移り住んだ。「この家は、廃屋だったので、水も電気もガスも何もきてなくて大変だったわ。でも、夫の日曜大工のおかげで、ようやく快適に住めるようになったの。ヨーロッパでは、古い家を大事に修復しながら住み続けるのが当たり前ですからね」。家の後ろには細い滝が流れ落ちる。滝がもたらす湿気は、逆説的ではあるが、漆を「乾かす」のに最適なのだそうだ。スザンさんは敷地内の納屋を改造して「ロス・スタジオ」という工房を構えた。こういったスザンさん家族の生活は、昨今人気の「スローライフ」の例として世間の注目を集めている。

夫は日本語を習得し、下の子が通う保育園のPTA副会長を引き受けるまでになった。2人の娘は輪島弁を話し、自然の中でのびのびと育っている。家族の生計を支えているのは、英語塾教師としての夫婦の収入だ。まだまだ漆では生活していけない。

昨年、スザンさんは再び漆芸研修所の門を叩いた。今は髹（きゅう）漆科の聴講生として週に何日か学校に通っている。仕上げ加工の「蒔絵」は学んだが、ひとり立ちして創作活動をしているうちに、実は基礎中の基礎である「塗り」がわかっていないことに気がついた、という。

「漆は奥が深いです。気がつくと自分の半生をかけていたなんて。本当に漆は『時間泥棒』です」。そうため息をつきながらも、スザンさんの眼はキラキラ輝いていた——まるで、かつて見た硯箱の宇宙のように、漆の世界には際限がないのだ、と言いたげに。eu

Suzanne Ross
スザン・ロス
漆作家

1962年英国生まれ。ロンドンで見た漆塗りに魅かれて84年に来日。90年石川県立漆芸研修所（輪島市）に入り、専修科（2年）と蒔絵科（3年）を修了。2000年より日本各地のギャラリーやデパートで個展開催。04年漆芸研修所髹漆科の聴講生。「国際漆展・石川2005」入選。